
魔法青年ゴルディアスたつや

さんのよん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法青年ゴルディアスたつや

【Nコード】

N6001N

【作者名】

さんのよん

【あらすじ】

「……母さん、離婚するわ」

「……………え？」

それは、ひとつの『幸せ』が壊れた瞬間だった。
少年は青年に、
小学校一年生から高校二年生になった。

——四月

神宮学園に転校した青年は様々な出会いをする。
出会いのひとつに『魔法』との出会いもあった。

出会いは青年にどう関わるのか？

これは、青年達の過去と今とを魔法と想いで繋ぐ物語

第一話（前書き）

すいません。

前、投稿したのをかなり修正しました。

第一話

「……母さん、離婚するわ」
「……え？」

幸せの壊れた音がした。

部屋の中で話をしているのは親子だった。

母親は金系の様な髪を腰の辺りまで伸ばし、陶磁器の様に白い肌に非常に整っている顔に宝石の様に輝く黄金の瞳を持っており。大抵の人は見たら口を揃えて美人と言うであろう容姿をしている。

少年の綺麗に切り揃えられた黒髪や黒い瞳は母親とは色が違うが、整った顔立ちや綺麗な肌など、女の子に見間違える様な容姿は母親の血が流れている証だった。

一瞬、理解が出来なかった。いや、理解したくなかった。

「え……母さん、離婚って？」

「ごめんね……なにも……聞かないで」

理解したくない俺の問いに母さんの謝罪が答える。

母さんの声は、悲しみに震えていて、白い肌には涙が流れていた。
「離婚って……どうして、あんなことがあったから？僕があんなこと言ったから？」

だんだんと語気が強くなっていくのが分かった。自分でも気持ち
が昂っているんだ。

納得できなかった、前まであんなに幸せだったのにあの幸せがもう無くなるということを理解したくなかった。

「それは違うわ！」

母さんが俺の言葉を否定した。

「たつやのせいじゃないわ……………悪いのは私……………そう、私が悪いの……………」

母さんも父さんも、離婚なんかしたくないはずだ。前まで、ほんの少し前まではあんなに幸せだったんだ。

けれど、納得してる自分がいた。あんな事があつたんだ……………あの幸せはもう壊れたのだとすぐに理解できていた。俺なんかが幸せになっちゃいけないんだ。だってあれの原因は——

「愛梨えりは！父さんはどうなるの！」

「愛梨は父さん……………秋臣あきおみさんと暮らすわ……………」

「そう……………なんだ……………」

だってあれの原因は俺なんだから。

少年が呆然と立ち尽くしてると母親は優しく微笑むと、少年に顔を近づけた。

「え……………なに、母さん？」

「おまじない——」

母親は少年の前髪を撫でるようにかきあげると、おでこにキスをした。

すると、少年は淡い黄金の光に包まれた。光はすぐに何事も無かったかのように消えた。

「たつやが……………私の息子のたつやが……………私達を幸せにしてくれたたつや

が…幸せになれるためのおまじない」

そう呟くと、母親はまた優しく微笑んだ。

「たつや、これからはもう…金城かねしろの姓は使えないわ。名前が変わるの…新しい名前、つまり、私の旧姓は——」

~~~~~

陽の光が目を覚まし、小鳥のさえずりが朝の訪れを知らせてくれる。

「夢……か……」

母さんが父さんと離婚したのは、十年前のことだ。

その時の俺は小学校一年生で、なにも出来なかった。そう、俺がなにも出来なかったから、二人は離婚したんだ。十年も前なのに…まだひきずつてるんだよね……いや、ひきずつてるからこんなことしてんのか。

「今日から、高2だつてのにな」

俺は自嘲気味に呟くと、バイトの先輩との連絡にしか使っていない携帯で時間を確認する。

「……！」

~~~~~

空は晴れ渡り、太陽が優しく地面を照らす。

街路樹の葉は青々と若葉が茂っており、街には綺麗な新緑が溢れている。

車があまり通らないのか、非常に空気が澄んでいて、暖かい風が頬をくすぐる。

こんな天気なら、花見にはもってこいだろう。

そんな天気の中、俺は——走っていた。そりゃもう全力で走っていた。

街を全力で走っていて、人とすれ違う度に変な目で見られてるのは気のせいだと思いたい。

高校二年生の転校初日に寝坊って……このままじゃ、遅刻だ、遅刻。遅刻したら目立つだろ、注目されたら………平和な高校生活が送れなくなる！

前の学校の二の舞は絶対になるもんか！絶対に遅刻はしねえ！

さっきから街を全力疾走しているこの青年。

非常に中性的な顔立ちに自分で切ったようなボサボサの黒髪が自然と似合っている。

男子にしては、細い身体に白い肌をしてるが、走るスピードはそこら辺の陸上部より速い。

青年は息ひとつ切らさず、街を走り抜けていった。

第一話（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

誤字、脱字、文法上の誤りがあつたら教えてください。修正します。

感想、アドバイス 待っています。

続きはいつ書くか分からないので、遅れたらごめんなさい。

第二話（前書き）

投稿が遅れてしまい、大変申し訳ありません。

では第二話です。

第二話

学校までもう少し、このままいけば遅刻はしないだろう。
平和な学校生活までもう一步だ。

俺は脚に力を込め、更なる加速をしようとした瞬間。

「っ!？」

目の前の曲がり角から何かが曲がってきた。
車か!やべえ轢かれる!

俺は踏ん張り全力で止まろうとする――が、

足、つつたあ!

いきなり脚に逆の力を込めたので足がつってしまった。

そんな足で車を避けれるわけは無く、ドンツと音をたて俺の体を
衝撃が襲った。

地面に背中が叩きつけられ、口からおかしな空気が出た。

あれ、おもったより衝撃が小さい?

体を感じる衝撃や痛みがとても車に当たったものとは思えなかつ
た。

俺が疑問に思いながら、空を見上げていると、

「ああ、あんパンがああ!」

可愛い悲鳴が聞こえてきた。

あんパン？

俺は車などではなく、人とぶつかったらしい。

俺はケガはなにか声をかけようとして起き上がり、女の子を見た俺は

「天……使………？」

無意識に呟いていた。

純白の羽を思わせる白い肌。幼い顔立ちに肩の辺りで綺麗に切り揃えられている小豆色の髪。身に纏っていたのは俺が今日から通う学校のブレザー。綺麗より可愛いというのが似合う女の子だった。

なぜか、俺はこの女の子を見たとき、天使だと思ってしまった。

俺、疲れてんのか？バイトのしすぎか？

その天使……じゃなくて女の子は

「ううゝあんパンゝ」

地面に落ちているあんパンを涙目で見てた。

天使に勘違いして出鼻を挫かれた俺は再び女の子に声をかけようとして、

「杏^{あん}、大丈夫？」

女の子の後ろから来た、もう一人の女の子に遮られた。ぶつかった女の子名前は『杏』というらしい。

もう一人の女の子が目に入った。

赤みが帯びた栗色の髪のポニーテールと琥珀色の瞳をもつ、とて

も、きれいな女の子。

俺はなぜか、その女の子から目が離せなくなった。
風がふき、一本一本が踊るようにたなびく髪に、吸い込まれるような不思議な輝きをもつ琥珀色の瞳に、俺は……その女の子に惹かれていた。

その女の子も俺が今日から通う学校のブレザーを着ていた。

「あ、ゆうちゃん。あんパンが」

「だから食べたまま歩くなって言ったのに……」

「うう」

「ほら、唸ってないで、土はらっちゃいなさい」

「はい」

俺に気付かず、話を続ける少女達。非常に声をかけづらい。

「大丈夫ですか？」

とりあえず、ぶつかった女の子にケガがないか確認する。

「あ、大丈夫で……す……」

ぶつかった女の子は俺をじっと見たまま、動かない。

もう一人の女の子は俺を驚愕と疑問が混じった様な目で見てくる。
俺の顔になにかについているか？そんなに見られると恥ずかしいんだけど……

しばらくすると、ぶつかった女の子は口を開いた。

「女性……ですか？」

「……？」

女性？俺か？俺のことを女だと思っているのか？

とりあえず誤解を解こう。胸ポケットから生徒手帳を出して、俺を女の子に見せる。

「たつや……」

「そう、俺の名前はたつや。俺は男…」

生徒手帳を受け取りながら言う。

「ご、ごめんなさい。その……綺麗……だったから……」
綺麗って……まあ気にしてないからいいけど。

「いや、謝るのは俺の方だって。あんパン……俺のせいでダメになっちやったしな……」

地面に落ちて土だらけになったあんパンが転がっていた。

土のついているところを剥がせば食べられるだろうが、そうしたら中身の餡子だけを食えることになるだろう。

「それなら大丈夫です！」

女の子はそう言うと言った鞆の中から紙袋を取り出した。

「もう一つ持ってますから」

女の子は紙袋の中のあるパンを頬張ると笑顔になる……が、

「はう！？このあんパンはお昼の分！」

笑顔が驚愕に変わる……が、

パクッ

また一口、頬張ると笑顔になった。

さつきから表情がころころ変わってなんか小動物みたいだな……

俺が一人可愛いものを見て和んでいるとポニーテールの女の子が話しかけてきた

「あんた、何であんなに急いでいたの？」

「そう、なんであんなに急いでたんですか？」

ぶつかった女の子も続いて聞いてきた。

ああ、それは……って、あんパン食べるの速ええ！ この短時間でもう最後の一口かよ！？

じゃなかった……なんで俺は走ってたんだっけ？

ハッ！？

「遅刻する……！」

走っていた理由を思い出した俺は呟いていた。

「え？まだ時間は大丈夫のはず……よね、杏？」

第二話（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

やっぱり、小説って書くの難しいですね。

頭の中にストーリーはあるのに、それを文章にするのが難しい。

まだまだ、小説初心者ですがこれからも頑張っていきます。

誤字、脱字、文法上の誤りがあつたら教えてください。修正します。
感想、アドバイス 待っています。

第三話（前書き）

第三話です。

やっぱり、小説って難しいですね。

第三話

俺の住んでいる街は関東地方の水^み雫市という。

この街には多数の学校施設が密集しており、全国に三つある国策学園都市の一つで、最大規模を誇る水雫学園都市は全国でもかなり有名らしい。

俺が今日から通う学校——神宮学園

もとは女子高だったらしいがだいぶ前に共学になって、今ではかなりの伝統を持つ学校……らしい。設備や教師の質が非常に高く水雫学園都市の中でもかなりの人気がある……らしい。

なんで、俺がこんなはつきりしてない言い方をしてるかというと、パンフレットに書いてあったのをなんとなくでしか覚えていないからだ。

俺がこの学校に転校した理由は………学費が安いからだ！それ以外に理由などは無い！

まあ、学校等の説明が終わったところで………現状説明。
俺は今、職員室の前に立っている。

遅刻しそうになって女の子二人と走ってきた結果、ギリギリで間に合った。女の子二人は急いで教室にむかったため、二、三言葉を交わして名前も聞かずに分かれてしまった。

転校して、今日から俺はこの学校に通うわけだ。
だが、始業したのは数日前らしく俺は朝のHRで担任の先生からクラスの皆に紹介される手筈になっていたので、職員室の前で先生を

待っていた。

前に転校の手続きやら確認をしに来たときには担任の先生に会えなかった。今日初めて会うことになる。少なくとも一年間は付き合う先生なので、静かな学園生活を送りたい俺にとっては理解ある先生が担任になることを望みたい。

そんなことを考えていると職員室の扉が開いた。

「ごめん、待った？」

中から出てきたのは、スタイルの良い女性。すごい美人だ、たぶんっていうか絶対モデルだろう。生徒からの人気もありそうだ。この人が俺のクラスの担任の先生だろうか？

「私の名前は高松。教育指導兼あなたのクラス2年B組の副担任よ」
副？

「副担任？話だと担任の先生が紹介するって話じゃ……」

「あゝ、あのバカね。なんか、いないのよね」

ケロッと言う高松先生。

「え！？ いないって！？」

「気にしないで、いつものことだから」
いつものことって……

「……………あのバカ、後で殺す」

「先生、なにか言いましたか？」

「なにもいってないわよ」

「そうですか……」

一瞬、先生から、殺気を感じた。

「君が転校生でいいのよね？」

「はい」

「えゝと…名前は……」

言いながら、先生は手元のファイルに目を落とす。さっきの話から察するに俺の詳しい事はまだ知らないのだろう。名前も知らない

から確認しようとしてるのだろう………まずい！

「たつやです」

先生が探し終える前に自分で名前を言う。フルネームを知られたら絶対に面倒なことになる。まあ……いつかはばれるだろうから問題の先送りにしかならないのだが……

「え、男子？」

「はい」

「ごめんなさい」

……なぜか、謝られた。

先生は「そういえば、男子の制服着てるわね……」とかブツブツいつてる。

そんなことをしていると、予鈴が鳴った。

「そろそろ、教室に行きませんか？」

いつまでも職員室の前で長話をしてるわけにはいかないだろう。ただでさえ、遅刻ギリギリできたんだ。このままじゃ、朝のHRが始まってしまう。

「そ、そうね、じゃあ行きましょうか」

~~~~~

俺は今廊下に立っている。職員室の前ではなく2年B組教室の前の廊下である。

高松先生が先に入っていった。「私が呼んだら入ってきて」とのことなんだが………

『バシイ！！』

『ベキイ！！』

『スカーン！！！！』

「へぐわっ！」ガタッ！ゴトゴトン！

なんか、教室の中からは普通なら聞こえるはずのない音がしてる。教室は先生が入る前は騒がしかったのだが、今は耳が痛いくらいに静かになっている。

「それでは、転校生です。さあ、入ってきて」

静かなせいで先生の声が綺麗に聞こえてきた……………入りづれえ。俺が教室に入ってクラスはの皆は一瞬ざわめいたが、すぐに静かになった。騒ぎたいんだろうけど、騒げないんだ。教室が静かになった理由が分かった。教卓のそばに立っている高松先生から言葉では表せないような威圧的なオーラが発せられている。

この空気には耐えられそうに無い、さっさと自己紹介を済ませてしまおう。

いや、こういうときこそ前向きにプラス思考だ。このままいけば、あれを、フルネーム隠し通せるかもしれない。

そこまでして隠すことじゃない気もするが、ばれたら、絶対面倒くさい事になる。

平和な学園生活を送るためにも、とりあえず、隠し通そうじゃないか。

俺は教室の前、中央まで歩き「たつやです」と挨拶をした。

よし、このまま「皆さん、これからよろしくお願いします」とかなんとか言えばミッシェンコンプリート、任務達成、万事解決だ。

俺は口を開く前に、今日から一緒に学園生活を送るであろうクラスメイトを見渡して――

驚愕に染まった琥珀色の瞳で俺を見つめるポニーテールの女の子と、不思議な瞳で俺を見つめる小豆色の髪の子の天使……じゃなく女の子を見つけた。

嫌な予感がした。

さっさと自己紹介を終わらせればいいのに、俺の脳は状況についていけず動きが止まっている。

小豆色の髪の子と目が合った。

すると、女の子は天使の様な純粋な笑顔を浮かべ、口を開いた。

「あ、ゴルディアス君。また会ったね、一緒のクラスなんだ。よろしくね！」

時が止まった。

『……ざわ……』

「ゴルディアス？」

『……ざわ……ざわ……』

「ゴル……ディアス？」

『ざわ……ざわざわ……』

「……ゴルディ……アス？」

終わった…俺の平和な学園生活。いや、いつそ清々しいな…隠そうなんて考えていた自分がバカみたいじゃないか。

あの女の子は悪気があってやったわけじゃないのは分かる。だって、教室がざわめいている理由が分からずにキョトンってしてるもの。

『ざわざわ…ざわざわ・・・』

俺は、騒然をとおりこして混沌と化している教室の中で今朝見た夢の続き、母さんの言葉を思い出していた。

~~~~~

「たつや、これからはもう…かねしろ金城の姓は使えないわ。名前が変わるの…新しい名前、つまり、私の旧姓は——」

「私の旧姓はゴルディアスよ」

~~~~~

『ゴルディアス~~~~!!?!?!?』

クラスメイトの声が教室に響いた。

そう、俺の名前はゴルディアス…………『ゴルディアス・たつや』だ！

### 第三話（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。

三話にしてやっと主人公の名前ができました。

誤字、脱字、文法上の誤りがあつたらご報告ください。修正します。

感想、ご意見、アドバイス 待ってます。

### 第三・五話（前書き）

今回はおまけみたいなものです。

### 第三・五話

高松先生がたつやを呼ぶまでの間教室の中でなにがあつたか？

「じゃあ、たつや君。私が呼んだら入ってきて」  
「はい」

ガラガラ

「みんな、おはよう」  
ざわざわ

『バシイ！！』

高松先生が黒板を叩き、黒板にヒビがはいった。  
静まりかえる、2年B組の皆。

「みんな……おはよう」

『おはようございます』

高松先生の二度目の挨拶に対して、綺麗にハモル2年B組の皆。  
「突然ですけど、転校生がいます」

ざわざわ……先生の突然の発表に再びざわめく教室。

『ベキイ！！』

高松先生の手刀が教卓を叩き割った。

「みんな……先生の話、まだ終わってないよ」

恐怖で顔を引きつらせ、再び静まり返る2年B組のみ――

「先生！転校生って女子ですか！可愛いですか！綺麗ですか！」

短髪の頭にバンダナを巻いている男子が拳手をしながら声を上げた。

それに対するクラスメイトが「お前勇気あるな」とか、「お前……死ぬぞ」や「来世でお幸せに」などの様々な感情を込めた視線で

その男子生徒を見ているが男子生徒はまったく気がついていない。

「いや可愛いですよ！可愛くないはずがない！」

「田山君……………」

高松先生は底冷えするような声でいまだ興奮しながら聞き続ける男子生徒の名前を呼ぶ。

「どうしました先生？ いや、今日も綺麗ですね」

『スカーン！！！！』

高松先生の投げたチョークが男子生徒の眉間に炸裂した。

「へぐわっ！」ガタツ！ゴトゴトン！

悲鳴をあげ、椅子から転げ落ちる男子生徒。

「田山君、後で生徒指導室に来なさい」

「先生、田山は気絶してます」

「…とりあえず椅子に座らせておいて」

「はい」

近くの生徒に気絶したまま椅子に座らされる男子生徒。

「ふう、このままじゃ話が進まないわね…」

「それでは、転校生です。さあ、入ってきて」

### 第三・五話（後書き）

次回で魔法が登場かな・・・

誤字・脱字・文法上の誤りがあったら報告してください。修正します。

感想、ご意見、アドバイス 待ってます。

#### 第四話（前書き）

投稿が遅れてしまい申し訳ありません。

色々と忙しくて……

今回、すごく文章が変です。文章の崩壊が起きてます。

それではどうぞ

## 第四話

あの自己紹介の後、色々あった。  
本当に色々あった。

今は昼休み。

今まで俺を質問攻めで苦しめてくれたクラスメイト達は俺に飽きたのか各々昼休みを満喫している。

俺は今日から過ごしていく自分の席で久しぶりの安寧を味わっている。

質問攻めつてすごいね。こんなに疲れるとは思わなかったよ。こんなに疲れたのは春休みに休憩無し三徹でバイトした時以来だよ。

いや、それにしてもゴルディアスって苗字そんなに珍しいかな？

確かに俺は黒髪黒目でハーフに見えないと容姿をしている。

けれど、俺の母さんは今日夢で見たように綺麗な金色の髪の女性だ。もちろん染めているのではなく生粋の金髪だ。

両親が離婚する前は父の姓で「金城たつや」だった。

十年前、両親が離婚してからは俺の名前は「ゴルディアス・たつや」になっている……いや、「たつや・ゴルディアス」のほうが正しいのか？

俺は「ゴルディアス」と呼ばれるより「たつや」と呼ばれるほうが好きだ。別に「ゴルディアス」という自分の姓が嫌だとか嫌いとかだいうわけではない。これは元は母さんの姓でもあり、母さんの祖先が代々受け継いできた姓だ。この姓には歴史があり、この歴史が

無かったら今の俺はいない。そんな姓を嫌いになんて俺はなれない。しかし、俺は母さんの自分の祖先や親のことを聞いたことが無い。母さんからも父さんからも、話そうとしなかった。なにか事情があるんだと思って俺から聞くことも無かった……いや、幸せだったから聞く必要が無かったのかもしれない。

話がそれた。

さっき述べたように俺は「ゴルディアス」という姓は嫌いではない。なのになぜ「たつや」と呼ばれるほうが好きかというと両親が俺につけてくれた名前だということもある。

大抵の人は俺のことを「ゴルディアス」と呼ぶときバカにしているように呼ぶ。別に俺自身をバカにするのはかまわない、俺が耐えられるだけだ。けれど、名前をバカにしているということは母さんや母さんの祖先をバカにしているようにしか思えない。それが気に食わないから俺は「たつや」と呼ばれるほうが好きだ。

クラスメイトの方々は俺がいくらいつても「たつや」ではなく「ゴルディアス」と呼ぶのをやめようとしないうだ。だけど、クラスメイト達に悪意があつてやってるわけではないことは分かつてる。転校したばかりの俺がすぐにクラスに馴染めるように話しかけてきてくれているのだ。

いいクラスメイトだ………昼飯でも食べるか。

「ゴルディアス君」

俺が鞆から弁当を取り出そうとすると、隣の席から声がかけられた。

振り返り、そこにいたのは幼い顔立ちに小豆色の髪——今朝ぶつかってクラスメイト達に俺の名前を教えてくれた女の子だ。

まあ、女に間違えられて生徒手帳を見せた自分のせいでもあるから強くは言えないんだけどな。

「えっと……名前は…？」

会話というコミュニケーションにおいて名前というのは大事なものだと思っている。

この女の子やクラスメイト達は知っているが俺はまだ知らない。

ポニーテールの子からは杏と呼ばれていたけど、こういうのは本人から聞いたほうが良い。

「あ、私の名前は小倉杏<sup>おぐらあん</sup>だよ」

「小倉さんか……今朝はごめんね」

急いでいたとはいえぶつかったのは事実。

ケガが無くて良かったが遅刻云々でちゃんと謝っていなかった。

「気にしないでいいよ、そのおかげで私達も遅刻しなかったから」

「そう、なら良かった」

ああ、優しい子だ。こんな子が隣の席でよかった。

「それじゃあ、これからよろしくね小倉さん」

「うん、これからよろしくね」

天使の様な女の子——小倉杏はそう言って微笑んだ。

「本当はもう少し早く話したかったんだけど……」

「ゴルディアス君、皆に大人気だったもんね」

あの質問攻めを大人気だったで片付けるか…小倉さんすごいな…。

「それにしても、転校生がゴルディアス君だったのにはびっくりしたよ」

「ああ、俺も今朝ぶつかった女の子がクラスメイトだったのには驚いたよ」

これは本当に驚いた。

また会えたらいいなと考えていてはいたが、まさか別れた数十分後に再開するとは思わなかった。

「そういえば、今朝はもう一人女の子いたよね？ポニーテールの子」

「ゆうちゃん？」

「そう、ゆうちゃん」

今朝はもう一人女の子がいた。ポニーテールに琥珀色の瞳の女の子。小倉さんはその女の子をゆうちゃんと呼んでいた。

「ゆうちゃんはね、私達の会長さんでお仕事が大変なの。だから、私に先に食べてて、ってお仕事してるの」

「そうなんだ」

ゆうちゃん（仮）はこの2年B組の会長らしい。始業したばかりらしいし仕事が大変なんだろう。今日は話できないかもしれないな。

「ゴルディアス君はこれからお昼ごはん？」

「そうだよ」

俺は鞆から弁当を取り出す。

神宮学園にももちろん学食や購買はある。

だが俺は自分で弁当を作って持ってきている。なぜならそっこのほうが安いからだ。

この弁当も俺が作ったものだ。

「だったら、一緒に食べよう」

小倉さんからお昼のお誘いだ。別に断る理由は無いだろう。いろいろと話が聞きたいしこっちからお願いたいくらいだ。

「いいけど、小倉さんのご飯は？」

他の人のご飯は気になるものだ。小倉さん見るがなにも持っていない。持ってくるなら待っていないきゃいけないしな。

「それは――」

「杏、買ってきたぞ」

俺は聞いたことの無い声を聞き、声の主を見る。

声の主は一人の男子生徒。手にはビニール袋を二つぶら下げている。

身長は俺より少し高い位で、カラスの濡れ羽色の髪は男子にしては長く目を引いた。

「ほら」

男子生徒はビニール袋の一つを小倉さんに渡した。

「ありがとう、滝村君」

「ああ」

滝村と呼ばれた男子はぶっきらぼうに言うと、小倉さんの隣の席に座り、もう一つのビニール袋からパンを取り出した。

小倉さんの友達だろうか？

「小倉さん、その男子は？」

「そういえば紹介してなかったね」

小倉さんはかじろうとしていたあんパンを置くと俺に向き直った。

「滝村君。私の幼馴染なんだ」

微笑む小倉さん。滝村を紹介できて嬉しいんだろうか。

自分の友達を紹介できるのは嬉しいものだ。それで友達も増えるんだから尚更だ。

「そうなんだ、よろしくな滝村」

滝村に向かって言う。いままで、質問攻めで話が出来なかった。やっとまともな友達と会話が出来そうだ。

「お前か…ゴルディアスっていうのは」

滝村は俺を見る。さっきは見えなかったけど……目、怖っ！

え、なに？ 俺なんで睨まれてるの？ 超怖いんですけど！？

「そう…だけど……」

「朝、杏にぶつかったらしいな……」

殺気！？ 滝村の声は震えていて心なしか怒りが滲み出てる気がする。

「あ……ああ」

俺の声を聞いているのかいないのか、滝村はゆらりと立ち上がり俺に俺と対面する。

ねえ、やっぱり睨んでるよね？ 俺なんかした！？

滝村は片手で俺の胸倉をつかむと俺の額に自分の額をぶつけてきた。

「え、なに？」

痛む額より、なにが滝村を怒らしているのかが気になった。本当に心当たりが無い。出合ったばかりのはずだ。あるほうがかしい。

滝村が人の数倍鋭い目で俺を睨む。その目には明確な怒りがある。そして、俺にしか聞こえない声で言葉を発した。

「杏が怪我したらどうするつもりだ？」

はつきりと聞こえた声は俺の予想外の内容だった。

「は！？」

「だから……杏が、怪我を、したら、どうすんだ」

俺に向かって言葉を区切りながらはつきりと話す滝村。

「あ、ああ……わるい……気をつける」

「今回は怪我しなかったからいいが……杏に怪我させたら許さねえからな」

声と共に殺気を一段と強くする滝村。

俺は滝村から距離をとり小倉さんを見る。

小倉さんは幸せそうにあんパンを齧っていた。

「大丈夫だ……俺は他人の幸せを壊しなんてしないさ」

あんな、幸せそうな顔を誰が壊すもんか。

「……滝村は優しいな、小倉さんがそんなに気になるのか？」

「な……うつせえぞ、女顔」

顔を赤くして反論する滝村。うん、滝村は友達思いのいいやつだ。だけど……

「女顔だと……それは聞き捨てなら無いな」

「朝に杏と大町にも女に間違えられたんだろ？」

「……………オーケー、まず睨むのをやめてくれ」

なんか、弱みを握られた気がする。

「これが素だ」

「え、嘘!？」

……………目つき悪っ!!

「大町って?」

「大町ゆうひ、俺達2年B組の会長」

ああ、ゆうちゃん(仮)か。

「なあ、滝村……………」

「なんだ?」

「俺って…そんなに女顔?」

「ああ」

即答!?

「まあ、いいや…」

俺は滝村に向き直る。

「改めて、これからよろしくな。滝村!」

「ああ、俺は滝村亮平。よろしくな……………ゴルディアス」

「……………あのさ、そのゴルディアスってやめてくれないか」

質問攻めでゴルディアスって呼ばれるのに疲れた。

「ゴルディアスって呼ばれ慣れてないから……」

さっき、嫌って程呼ばれてけどねと付け足す。

「だから、たつやって呼んでくれ」

「たつやか、わかった」

「小倉さんも」

二つ目のあんパンを食べている小倉さんにも声をかける。

「わかった、よろしくねたつやくん」

そんなこんなでやっと昼食。

俺は弁当箱を開く。

「たつやくんはお弁当」

小倉さんが今日合計五つめのあんパンを食べながら聞いてきた。

「うん、手作りだけどね」

弁当なんて、久しぶりに作ったからあまり上手くいなかった。  
昨日、作り置きしといて良かった。寝坊して朝作れなかったから  
な……

「すごい、自分で作ったの？」

まぶしい笑顔で聞いてくる小倉さん。そんなに珍しいだろうか手作りの弁当？

「ああ、俺一人暮らしだし」

「学食や購買は使わないのか？」

滝村が自分の食べているパンを見せながら、聞いてくる。

「使えたらいいんだけど…高いから……」

「高いって……学食はともかく購買は一つ百円かそこらだぞ」

滝村が変なものを見るような目で見てくるがスルーする。  
一食にそんなに金はかけられない。

「さて、それじゃあいただきます……」

小倉さんがキラキラして目で俺を——俺の弁当を見ている。

「食べる？」

「いいの！」

そんな目で見られたら断れません。

「どうぞ」

弁当を小倉さんに差し出す。

「それじゃ……」

小倉さんがおずおずと卵焼きに手を伸ばす。

だが、俺は気付かなかった後ろから忍び寄るポニーテールに！

「いただき——」

小倉さんが卵焼きをつかもつとしたその時、

「いったつだつきまーす」

小倉さんの声と手をさえぎったのは今朝、あつたポニーテールの女の子——「大町ゆうひ」だった。

俺と滝村と小倉さんは急に現れた大町さんに、驚いて動きが止まっていた。

大町さんはそんな俺たちにお構いなしに、小倉さんより先に取った卵焼きを飲み込んだ。

「おいっしい！ これ本当にゴルディアス君が作ったの？」

「え？ あ……まあ…………」

その瞬間。ゴルディアスたつやの作った弁当が美味しいという情報で2年B組の中に駆け巡った。

「ゴルディアス、俺にも一口食わせて！」

「俺にも、俺にも」

「本当だ、うめえ！」

「うまかったぜ、ゴルディアス」

一瞬にして俺の手から弁当箱をかつさらうとクラスメイトは見事な連携で23.7秒という記録的なタイムで俺の弁当を空にした。

「……」

俺、滝村、小倉さん、大町さんは急におきた事体についていけず呆然としていた。

「俺の昼飯いつ……！」

俺の悲痛な叫びが教室に響いた。

皆が喜ぶのは別に構わないが、昼飯抜きはちょっとキツイ。

「……」

滝村は無表情でパンをパクついている。

「アハ……ハハ……ハ……」

大町さんは固まっている。

小倉さんは……

「うう……私の卵焼き……」

ええ、小倉さん、そこお！？俺は心の中でツッコミをいれつつ

……

「大町さん……俺の昼飯………」

大町さんに声をかける。だが、

「ごめんっ!!」

大町ゆうひは逃げ出した。

「はぁ」

今日は昼飯抜きでした。

~~~~~

放課後

昼休みの件から、数時間たち、今は放課後。

大町さんとは何か会話を試みたけど、全て逃げられてしまった。
昼の事は気にしてないから軽く挨拶をしようとしてるだけなのに

……

今日、最後のチャンスである放課後も逃げられてしまった。

挨拶は明日に持ち越すことにして、バイトに向かう。

昼飯抜きなので、バイト先でまかないでも食べさせてもらおう。

そう思い、俺は少し早足でバイト先に向かう。

今日はいろいろあった、朝に小倉さんと大町さんと会って、同じ

クラスだつてことにびつくりして、滝村に睨まれて友達になったり、大町さんとクラスメイトに昼飯を全部食べられたり……………

明日は大町さんと友達になろう。

明日からのことを考えると自然と足取りが軽くなった。
いい気分だ。

今日は近道で行ってみるか……

だが、俺はまだ知らない。今日はまだ終わってない事に。
これから、自分の人生を変える『出会い』があることに……………

第四話（後書き）

すこし書き方をかえてみましたがどうでしょうか。
やっぱり小説って書くのが難しいですね。

魔法登場は次回です。

読んでくださりありがとうございました。

誤字、脱字があったらご報告ください。
感想、意見、アドバイスを待っています。

第五話（前書き）

大変長い間更新せず、すみませんでした。

相変わらず、文脈が定まらず低クオリティですが楽しんでくだされば嬉しいです。

第五話

「ハア…ハア…」

ここは水雫市の商店街。

学園都市と呼ばれるだけあって、学校が多いこの街はもちろん生徒の数も多い。

授業が終わったこの時間は学校帰りの生徒で溢れかえり賑わっているはずだ。

——しかし、

街には人が一人もいなかった。

陽も沈んでいないこの時間、街に一人も人がいないというのはありえない。

店は開け放たれたままで、ついさっきまで店が開いているような状態、通行人も車も一切通らず。まるで……街から突然人が消えてしまったようだった。

人がいない街の中を駆け抜ける人影があった。

歳は十代半ばだろうか。

赤と白の服に膝上までのミニスカート、羽のように腰から伸びている一対の赤い腰布。

赤みがかった栗色の髪は赤いリボンでポニーテールにまとめられ尻尾のように踊っている。

手には杖が握られている。木から削りだしたような杖の先端に黄金の石が埋め込まれていて、まるで魔法使いの杖だ。

スカートから伸びている健康的な足はスラリと伸び、胸にある控えめな膨らみからその人物が少女であることが分かる。

「ハア…ハア…結界が張られてるわね……」

少女の口から言葉が漏れた。荒い息をつきながら走る少女の口から上は仮面に隠されて見えない。

「訓練後を狙われるなんて、なにが情報操作は完璧よ!? 漏れてんじゃない」

少女は憎々しげに呟くと後ろを振り返る。

少女の視線の先には、自分を追いかけてくる七つの黒い塊があった。

いや、塊という表現には間違いがある。塊を覆っているのは黒い毛皮。八つの塊のそれぞれから白い爪を持つ四本の脚が生えており、突き出た頭部には白い牙が並んでいる。

獲物を狩る瞳を光らせて少女を追いかけているのは3メートルを越す巨体を持つ黒い狼だった。

「使い魔か、それとも別の何かか……」

黒い狼はだんだんと少女との距離を詰めていく。

「このハーツが狙いよね」

少女は自分の杖を一瞥すると足を止め後ろに向き直る。

八匹の狼はコンクリートを踏み砕きながら、自分のもとへと迫りきている。

「戦闘は嫌っていったのに……これも全部、あのバカ教師のせい……」

少女の周りの温度が急速に上昇、空気が揺れ、陽炎が生まれる。

「あのバカ教師……後で燃やす！」

少女は怒声と共に大きく杖を振りかぶった。

~~~~~

たつや・ゴルディアスは困惑していた。

俺は学校の帰り道、バイト先に向かう際に近道を通った。  
理由は無い。あえて言うならなんとなく、気分だ。  
それで近道を通ったのはいい、いいんだが……

「迷った」

道に迷いました。

迷った道は人通りの少ない道で、街頭も無く日が傾いてきた今はもう薄暗い。

この街、水栗市は学園都市というだけあって人も多く活気もあつて非常に賑やかだ。そのおかげでバイト先に困ることはない。

先ほどから、道を聞こうと思っているのだが人影はおるか車も見かけない。

水栗市でこんなに静かな道は珍しい。

「さて……どうするかな？」

このまま、がむしゃらに進んでも店には辿りつけないだろう。  
来た道に戻るかと考え始めたその時、

『——オオオン……』

熱風が頬を撫でた。

続いて、聞こえてくるのは爆音。

なにが起きた？爆発事故でも起きたのか？

爆音のした方を見ても、建物に隠れて何が起きているのか分からない。

『——オオオオ……！』

今度は獣の叫び声のようなものが聞こえた。

ここで何かが起きている。

また、爆発音が街に響く。

こんな騒ぎが起きているのに住民の反応がない。人の気配を感じない。

いくら、人を探しても見付からないわけだ。

この街に今、人はいない。

なぜだか、分からない。だけど、今俺はここにいる。

俺はどうするべきか……いや、なにもしちゃいけないのかもしれない。

い。

俺はこの街にきてからまだ一ヶ月。この街には俺の知ってはいけないことがあるのかもしれない。

「けど…俺はあのときみたいに後悔したくない。」

あのとき……？あのときってなんだ？

『——オオオオオン！』

一際、大きい轟音が俺の疑問を掻き消した。

「……よし」

俺は何ができるか分からない。

だけど………あつちで誰か苦しんでいるかもしれない。

誰かのためになるなら出来ることをしたい

誰かのためになにか出来るならなにかしたい。

「俺以外の幸せのために」

俺は口が無意識に動いていたのに気付かず、爆音の元へと向かった。

## 第五話（後書き）

長い間更新できずすみませんでした。

言い訳させてくれれば

文化祭↓新人戦↓風邪↓レポート↓テスト だったんです。

誤字・脱字、文法上の間違いがあれば教えてください。

感想、意見、アドバイス 待っています。

次回の更新も未定です。なるべくはやく更新するので楽しみにしてください。

## 第六話（前書き）

遅くなってしまい、申し訳ありません。  
第六話です、お楽しみくだされば嬉しいです。

## 第六話

もう、陽が沈む頃。

静寂に包まれた水雲市はオレンジの空気で満ちていた。

東の空が紫に変わり始め、西の空には今日一日の役目を終える太陽が赤く燃えている。

夕陽の光が、一人の人物を照らす。

腰に二段フリルのついているロングスカート。

白を基調とし細部に黄金の装飾や刺繍が施されている服はドレスにも見劣りしない。

手には黄金に輝く杖。杖の錫状頭部分には黄金の宝玉がついており、宝玉を中心に放射状に七つの刃が伸び、一つの輪が刃を繋げている。その装飾は太陽を模っているようだった。

光を糸にしたような髪は短いながらも白いリボンで纏められ。

整った顔立ちに閉じられた双眸は美しく女神の様な神々しさを感じさせる。

体の周りには光の粒子が舞い、陽の光を乱反射、辺りに満ちた光の全てがこの人物の美しさを讃え、更に美しくさせているようだった。

その人物は眼を開く。瞳の色は黄金だった。

そして、自分の姿を見る。なにが起こったかを確認しているように。

一度、静かに眼を閉じ、

「な、」

眼を見開くと同時に口を開いた。

「なんで俺は女装してるんだー！！！」

黄金の人物、「たつやゴルディアス」の絶叫が街に響いた。

~~~~~

時は少し遡る。

~~~~~

今日は様々な出会いがあった。

これは全て偶然なんだろうか？ 必然なんだろうか？

それとも、運命なんだろうか？

一つ、確実にいえる事は今日で俺の運命は変わった。

これは、運命的な出会いといえるだろう。

そして、俺は確信してる。この運命的な出会いはこれから先、絶  
対ある。

この出会いに対して、俺はどうするんだろう？

それは、まだ分からない…。

~~~~~

目の前で行われているのは、獣と少女の戦い。

獣は3メートルを越す巨大な黒い狼が四匹。

少女は自分と同じほどの年齢であろう、赤と白の服にポニーテールが特徴的な仮面の少女。

獣は地面を踏み砕き、その巨大な顎で、鋭い爪で少女を襲う。

しかし、少女は獣の攻撃をかわしながら杖を振り、炎を操り迎撃する。

「グウルオオオオオオオ！」

黒い獣は咆哮とともに少女に爪を振り落とす。

少女は後ろに跳躍することにより、その爪から逃れる。

だが、獣は一匹だけではない。

跳んだ先にいる獣はその大きな顎で少女を噛み砕こうと口を開く。

少女は再び地面を蹴る。

獣の口が勢いよく閉じられた。

口の中に少女の姿は無い。少女の姿は獣の上空にあった。

「とつた！」

少女は杖を大きく振りかぶる。

少女の体から炎が巻き起こり、周りの空気の温度が上昇、灼熱と化する。

巻き起こる炎は轟炎に燃え上がり形を作る。3メートルを越す巨大な円錐。獣どころか空気をも燃やす勢いの槍。

それは燃え盛る轟炎の突撃槍。

「フレイムランス！」

炎の槍は獣を背中から貫き、一瞬にして灰にした。

「ハア…ハア……」

少女は地面に降りると息をついた。今までの戦闘でだいぶ無理をしたのか、かなり疲労が溜まっているようだった。

獣の数は三匹、少女の様子を伺っている。

少女は先ほどの攻撃で八匹いた獣の数を三匹まで減らしたのだった。

バイトに向かう途中、突如街に響いた爆音・轟音。

そんな騒ぎが起こって、俺はやっと街に人がいない事に気づいた。爆音のもとへと向かった俺。

しかし、その先で見たものは俺の予想外のものだった。

ここは水雲市の町外れ。空き地が多く、人もあまり住んでいない。俺の家もこの近くにあったりする。

学校近くの街から、轟音が人の住んでいないほうへ移動しているのを追いかけてきて、ここに着いた。

化け物と少女が戦っている。

あの少女は、困っているのだろう……だけど、これは俺が手を出せるのか？

これこそ、俺は手を出せない事なんじゃないか？

俺は、今少女を助けられるか？

今も少女と獣との戦闘は続いている。何の力も持っていない俺があんな戦いに参加できるわけが無い。むしろ、少女の邪魔になるんじゃないのか？

だけど……俺はここから逃げちやいけない。

俺の理性は今すぐここから逃げろと訴えている。

けれど、心が訴えている、『逃げるな』と。

不思議と恐怖は感じなかった。

昔、もつと怖いことがあった気がする。思い出せないけど、すごく……嫌な事だ。

獣と戦う少女を見る。獣の攻撃をかわし、炎で攻撃する。

その実力は獣たちよりも上で、確実に獣たちを追い詰めていく。炎を操り、獣と戦う動きは眼に焼きついた。

杖を操る少女が怪物と戦う。

昔、こんなものをテレビで見た気がする。幼い頃、妹と一緒に。魔法少女なんとかってアニメ番組で、魔法使いの女の子が皆の悩みを解決していく話だ。

決して、獣と生死をかけた勝負はしなかった。

だが、目の前で起きることはフィクションではなく現実だ。

あの炎は魔法なのだろうか？ だったら俺も魔法が使えればいいのに。

そうすれば目の前の少女だって助けられるし、母さんだって……

もう一度、少女を見る。ポニーテールが特徴的で赤と白の服を着ている少女。顔は仮面で見えない。

どこかで、みた事がある気がするのに思い出せない。まるでなに

かに邪魔をされているようだ。

再び、爆音が鼓膜を震わせる。獣の一匹が火に包まれながら目の前に落ちてくる。

獣に赤い線が走ったかと思うと獣は一気に燃え上がった。

火をはさんで、少女と目が合う。

「なんで、あんたがここに!？」

その声は俺には聞こえなかった。

少女は驚き、動きが止まる。だが、それは明確な隙になった。獣の一匹が一瞬で間合いを詰め、少女に爪を叩き付けた。

「クッ!」

少女は反射的に爪と自分の間に杖を割り込ませる。それにより、直撃は免れたが衝撃は殺せなかった。

杖が弾かれ宙を舞い。少女はたつやを巻き込み、10メートルは吹き飛ばされた。

「ぐっ……!」

地面に叩きつけられ、うめき声とともに口から空気が漏れる。

少女の様子を確認する。目立った外傷は無いようだ、気絶してるようだ。

少女を静かに寝かせると、立ち上がり自分の頭を押さえる。

ぬるっと奇妙な感覚がしたので掌をみると、真っ赤な血がついていた。

少女の怪我を肩代わりしたのならそれでいいかと、手を握り締める。

ほら、結局、少女の邪魔をしただけじゃないか。
さっさと逃げれば良かったんだ。

冷静な自分、理性が言ってくる。

獣はこっちを睨みつけている。

今からでも遅く無い、少女を連れて逃げれば良い。

逃げようとして体を動かそうとしたとき。

空気を裂き、何かが地面に刺さった音が聞こえた。
それは先ほど弾き飛ばされた少女の杖だった。

木から削りだしたような杖の先端に黄金の石が埋め込まれていて、まるで魔法使いの杖だ。

その杖をみて、理性の声が消えた。

俺の意思なのか、誰かに操られたのか、俺は無意識に吸い込まれるようにその杖を握っていた。

杖に血が染み込む。

《使用者の変更を確認》

凜とした女性の声が響いた。

《周辺に敵性反応を確認。緊急起動……同調開始……リンク……エラー エラーの原因を確認》

この声は聞いたことがある。

《使用者に封印魔法の存在を確認 封印の一部を解除……》

視界の端で残り二匹になった獣が向かってくるのが見えた。

《新規使用者の魔力を確認。魔力波長チェック……魔力同調率99,28%……》

長い間、聞いていないこの声は……

《やっと会えました、マスター》

母さんの声だ。

狼達が一斉に襲い掛かってくる。

俺は動かない。

いや、動けない。

俺の意思？ 分からない。

操られてる？ 分からない。

だが、俺は叫んだ。

「ウェイクアップ！」

俺の足元に黄金の光の線が浮かび上がる。五重の円に読めない文字か紋様。中心の円を中心に放射状に七つの剣が描かれている。それはゲームやアニメで見る魔方陣そっくりのものだった。

体から光が溢れる。

黄金の粒子の奔流ともいえるそれは向かってきた獣の片方を巻き込み消滅させた。

光が収まると同時に足元の魔方陣は消えた。

ここまで来て、ようやく冒頭に戻る。

「なんなんだ、これは？」

俺の言葉に伝えてくれるものはいない。

後ろには気絶している少女。

前には最後の一匹の獣。

右手には、黄金の杖。

そして、なぜか女装してる俺。

本当になんなんだ？

もう一度、自分を見る。スカート、綺麗な服、杖。
まさか……！？

「魔法……少女……？」

いや、ちよつと…ちよつと待てよ。俺は確かに魔法が使えたらいいなとは思ってたが、これは予想外だ。だいいち、この服はなんだよ、女装じゃないか！？ 髪の色も変わってんじゃないか！ 魔法少女って…俺は16歳の男子高校背だぞ。少女じゃなく、青年だぞ。魔法青年？ いやいやいやいや、なんだその単語は？ 落ち着け、まず落ち着け俺。落ち着くんだ、ゴルディアスたつや。「魔法青年ゴルディアスたつや」って可笑しいだろ！？

混乱してる俺に獣が襲いかかってくる。
隙だらけだった俺に、容赦なく巨大な爪が振り下ろされ――

《マスター、手を前に》

咄嗟に杖をもっていない手を前に出す。
塞き止められていたダムが決壊したかのごとく体の中から、力が溢れてくる。

《イージス》

俺の前にさつきとは形の違う魔方陣が現れる。
獣の爪はその魔方陣にはじき返された。

自分の攻撃が防がれた獣は一度、距離をとった。

《マスター、攻撃を》

また、声が響く。

「攻撃っていつでもどうすれば…」

先ほどの少女と獣の戦いを思い出す。

俺に少女のような事ができるとは思えない。

《イメージしてください。あの敵を倒すための攻撃を》

イメージ？

《制御は私が行います。マスターはただ、力を解放してください》

俺はその言葉をすんなりと聞き入れた。

杖の先を獣に向ける。

それを見た獣は大口を開き、唸り声をあげながら、俺に迫ってくる。

不思議と心は落ち着いていた。

イメージする、光の奔流を。

イメージする、少女の魔法を。

イメージする、獣を貫く光の攻撃を。

《シャインストライク》

杖から一筋の光が放たれた。

光は獣を簡単に貫き、獣は光の粒子となって空気に溶けるように消えていった。

獣を貫いた光は、地面に当たるとコンクリート製の道路を吹き飛ばした。

《Mission Complete! お疲れ様です マスター》

その声が響くと、服が消え、学校の制服に戻る。黄金の髪もとの黒髪に。たつやは気付いていないが眼も黒に戻っていた。杖がひかると、杖が消え手にはビー玉サイズの黄金の宝石があった。

俺は考えるのやめた。宝石をポケットに突っ込むと、俺は少女のもとに駆けた。

少女に怪我は無い。念のために、病院に連れて行きたいが…「大きな狼と戦っていたので見てください」って病院の人に言うのはどうかと思う。

俺が悩んでいると、少女の服がひかった。

赤と白の服が消え、神宮学園の女子制服になった。

仮面が落ち、隠れていた顔があらわになった。

その顔は見たことのある顔だった。

「大町さん!？」

~~~~~

俺は、目の前の少女——大町ゆうひを看ていた。

大町さんは布団に横になり、俺はその横に座っているかたちだ。

あの後、俺は倒れている大町さんを背負い、俺の家に連れて寝かせていた。

俺の家は、水雲市町外れのボロアパート。築何年か分からない木造ボロアパートだ。

制服のまま、寝るのは寝苦しいかもしれないが我慢してもらっし

かない。

呼吸も規則正しい、怪我は無い。そのうち、眼を覚ますだろう。目を覚ましたら、大丈夫か確認して、事情を聴こう。

外からは車の音など、街特有の喧騒を感じる。街に人は戻ったみたいだ。

お茶でも飲もうかと、立ち上がりお湯を沸かす。

「バイト、さぼっちゃたな……。ま、いいか」

大町さんのためになにか準備しておこうか？ まあ、目を覚ましてからでいいだろう。

やかんの音が響く。急須にお湯を入れて、大町さんの横に座る。

なんで、あんな夢みたんだろう？

ふと、今日の始まり。遅刻する原因になった朝の夢を思い出す。今まで、思い出さなかったのに……………  
母さんが俺に離婚の話をした記憶だ。

あの時に俺の幸せは壊れた。

俺の家族は父さん、母さん、俺、妹の四人家族だった。

俺が六歳、小学校一年生のときに両親が離婚して、家族は母さんと俺、父さんと妹の二つに分かれた。

俺の母親は金髪金眼の外人で息子の俺が自慢できるくらいの美人。父親は純潔の日本人で聡明な人だった。

二つ年下の妹は両親の血をしっかりと受け継いで父さんの黒髪黒眼に母さんの美しい容姿を持っていた。別れたときは幼稚園だった

が今は中学三年生、美人になっている事だろう。

父さんはかなりの実業家だったらしい。仕事ばかりではなくいつも家族を気にかけている優しい人だった。

無駄に贅沢な暮らしをせず、少し大きな家で家族四人、楽しく暮らしていた。

そう、いつも四人で楽しく、幸せに暮らしていた。

父さんと母さんは新婚顔負けの相思相愛っぷりでとても離婚するとは思えなかった。

隣の家とも仲がよく、家族ぐるみの付き合いがありその双子と俺と妹でいつも遊んでいた。

……あれ、離婚する理由が見当たらない。

なんで父さんと母さんは離婚したんだ？

なんだ、この違和感。どうして、母さんは離婚したんだ。

納得できない……理解できない……

違う、納得したくなかった……理解したくなかった……

離婚した理由は？　なんであの幸せが壊れた？

壊れた？　違う……壊した？　俺が……壊した？

どうして……壊した……

俺は必死に思い出そうとした。

思い出せない。まるで、すりガラス越しに景色をみているような違和感。

俺は理由を探し出そうと記憶の海を潜っていく。

記憶の奥深く、最深部まで潜って頭に断片的に記憶が流れ込んできた。

身を焦がす赤い炎、吹き荒れる翠色の風、黒い何か、そして暴力的な黄金の光。

思い出した。俺があんなこと言ったから、あんなことしたから……皆の幸せが壊れたんだ……俺が壊した。

俺が、家族の、二人の、たくさんの人達の、皆の幸せを壊したんだ。

だから俺は幸せになっちゃいけないんだ。俺が幸せになるくらいなら俺以外の人を幸せに――

『おまじない』

母さんの声が聞こえた気がした。

俺の心に優しい光が浮かぶと記憶が滲んで……ぼやけて……

俺は自然と、眠りに落ちた。

~~~~~

朝、鳥のさえずりと、陽の光で眼を覚ます。

「ふぁ……」

一つ、あくびをすると携帯で時間を確認。まだまだ大丈夫。肩から毛布がずり落ちた。毛布がずり落ちた？

「あれ？　なんで俺座って寝てたんだ？」

まだ、半分寝てる頭で部屋の中を見る。

目の前には毛布がない、誰も寝てない布団。俺はその横で座って寝ていた。

机の上には、すっかり冷めている急須。

昨日のことを思い出す。

「なにか…夢を見た気がする」

夢の内容はなんとなくしか思い出せない。

大町さんが炎で、狼を倒して、俺が魔法青年で……

「変わった夢だったな…」

学校の準備を済ませて、家を出る。

だが、俺は気がつかなかった、ポケットの中に黄金の宝石があることに……

第六話（後書き）

はい、第六話でした。

やっぱり、小説って書くのが難しい。上手くかけない。話が進まない。

毎度の事ながら、次回の更新は未定です。新キャラがでます。キヤラ紹介でも作るのかな……

誤字・脱字・文法上の誤り、なにかおかしいところがあったらご報告ください。

感想、アドバイス等お待ちしております。

読んでくださり、ありがとうございました。

第七話（前書き）

更新遅れてすみませんでした。
それではお楽しみください。

第七話

転校初日も緊張するけど、転校二日目も気にするよな……

私立神宮学園2年B組の教室のドアの前で俺、ゴルディアスたつやは立ち尽くしていた。

目の前には何の変哲も無いただのドア。プラスチックにすりガラスが埋め込まれているそれは今の俺には異界への扉に見えた。

昨日の質問攻めだ。今日もどんな反応されるかわかったもんじやない。

疲れのせいかな昨日のことはよく覚えてない。

「ふう」

体がだるく重く感じる。

「……よし」

眼の前の鬼門に手をかける。そして、ゆっくりと確実にドアをスライドさせた。

「みんな、おはよう」

よし、自然だ。極めて自然だ。おもわず心の中でガッツポーズをとる。

「よう、ゴルディアス。おはよう」

「おはよう、平賀さん。昨日も言ったけどたつやでいいよ」

「おはようさん、ゴルディアス」

「おはよう。 たつやでいいよ、 藤原さん」

「おはよう、 ゴルディアス君」

「たつやでいいよ、 菅原さん」

「グッモーニン！ ゴルディアス」

「たつやで——」

「ゴルディアスじゃねえか、 おはよう」

「……………」

あきらめよう。

そうだ、 人間諦めが肝心って言葉もあるしな。

俺が席に着くとふと甘い香りが…

「おはよう、 たつやくん」

元気いっぱいの優しい声が俺の耳に届いた。

幼い顔立ちに肩の辺りで綺麗に切り揃えられている小豆色の髪。

昨日、ぶつかった女の子、小倉さんだ。

「おはよう、 小倉さん」

「大人気だね、 たつやくん。 どうしたの？ 疲れてそうだね」

「うん、 ちょっとね……………」

精神的に…………ね。

「疲れてるときには甘いもの！ デニッシュをどうぞ！」

鞆からだした袋を渡してくる小倉さん。 袋の中には手作りと思われるデニッシュが

さっきの甘いにおいはこれだったのか……

「え、いいいいよ。小倉さんが食べちゃって」

「だーいじょうぶ！ 甘いものは食べたい人に食べてもらうのがいい
つちばん幸せ。だーから、これはたつやくんが食べるべきです」

「そ、そう。じゃあ…ありがとうございます、いただきます」

「えへへ、どういたしまして。さあ、たべてたべて」

「それじゃ、いただきます」

ほんのりと優しい味が口の中に広がる。とても美味しいデニッシュ
だった。

「おいしい」

「元気になった？ たつやくん」

「うん、ありがとう。小倉さん」

「よかった」

天使の様な笑みを浮かべる小倉さん。おもわず、その顔に見とれ
てしまう。

「杏、落とし物だ」

新しく聞こえてきたのは、昨日に聞いた覚えのある声だった。

「え、なに？」

「財布…落としてたぞ」

「わっ、本当だ。ありがとう滝村くん」

滝村亮平——小倉さんの幼馴染。このクラス2年B組で俺をたつ
やと呼んでくれる二人の内も一人。もう一人は言わずもがな小倉さ
んだ

「よう、滝村」

「たつやか…」

滝村の鋭い目が俺を視野に捕らえた。

「滝村、睨まないでくれ」

「昨日も言っただろ、これが素だ」

「……すまん」

席に着く滝村、昨日からなにか怒っているように思える。
カラスの濡れ羽色の髪が鋭すぎる眼を隠して、その表情は見えなくなつた。

「あ、ゆうちゃん。おはよう」

教室に入ってきたのは赤っぱい栗色のポニーテールが特徴の2年
B組会長。大町ゆうひだった。

「やあ、大町さん。おはよう」

小倉さんと話してた大町さんは俺を見つけると、動きを止めた。
そのまま、つかつかと俺の目の前までくると…

「きなさい!」

いきなり襟を?み引きずっていった。

「お、大町さん!?!」

大町さんは俺の声を聞いていないように俺を引きずっていく。

「痛っ！　ちょ、ちよつと階段！　段差が！」

途中、「立ち入り禁止」の文字が見えた気がしたが気のせいだろう。

この光景を見ていた生徒達によって神宮学園に「変わった名前の転校生」に引き続き、新たな噂が広がったのは別の話だ。

着いたのは屋上だった。

やっと、襟を放してくれた大町さんは振り向くと口を開いた。

「さあ、昨日なにがあつたかはなしてもらわよ！」

「……え？」

その時、始業を告げる鐘がなった。

なんのことかわからず、ポカンとしてしまう。

「だから、昨日のことをはなしなさい。さもないと……」

屋上に風が吹き、大町さんのポニーテールが揺れた。

「燃やすわよ」

その言葉は静かに屋上に響くと、風にかき消された。
屋上の温度が一気に高くなる、だが、俺の背中には冷や汗が流れ

た。

なぜか？ 目の前の少女から同年代とは思えない威圧感が放たれていたからだ。

だけど…昨日のこと……？

「大町さん…」

「なによ、はやくいいなさい」

「昨日のことって…？」

「って…あんた、昨日なにがあつたか覚えてないの？」

「ああ、なんだか変な夢を見た気がするんだけど…」

「あんた、本当に覚えてないの」

「……覚えてない」

大町さんはずっと寄つてくるとその琥珀色の瞳で俺の目を覗き込む。

って 顔が、顔が近い。

しばらくすると、大町さんは目を離した。

「はあ、嘘はいつてないようね……」

大町さんが離れると、屋上の温度が元に戻る。

昨日、俺なんかやったのか？

「……記憶操作？ それとも幻惑？」

なんだか大町さんがぶつぶつ言っていると、

「なあんだ？ 修羅場じゃなかったのか」

男の声が上から聞こえた。

「よッ…と」

屋上の出入り口の上、給水塔から一人の男が飛び降りてきた。俺達と同学年だろう。俺と同じ制服を着てることから神宮学園の生徒であることが分かる。

短く切り揃えた髪に空色のバンダナが似合う男子生徒だった。

「って会長じゃん。珍しいな会長がサボりって」

「なんだ、あんたか」

「相変わらず、つれないな会長は…」

男子は、俺に気付かないで大町さんに話しかける。

「そうだ、知ってるか会長、俺達の2年Bに組転校生が来るんだぜ」

「遅れてるわよ、あんたそれは昨日よ」

「な、なんだと……この俺が遅れてる？ 遅いだと……」

両膝に両手をついて、項垂れる男子生徒。

「大町さん、この人は？」

「あ、えーっと、これは同じ2年B組の……」

「神宮学園一のナイスガイ！ 地上最速の男、たやま かずき田山和輝だぜ！ よろしくお嬢さん」

跳ね上がって、自己紹介をする男子生徒——田山和輝。
お嬢さん？

「いっとくけど、俺は男だぜ」

「な、なんだってー」

~~~~~

「なんか、朝から疲れた……」

俺は机にうなだれていた。

あ後は田山と自己紹介して、屋上から帰ってきた。

田山は俺や大町さん、滝村と小倉さんと同じ2年B組なんだが今はサボリの常習犯らしい。

時間を見計らって、俺と大町さんは教室に戻ったが田山はそのまま、屋上で寝るらしい。

周りの視線はもう、気にしないことにする。

「次は…物理か」

始業の鐘の音をBGMにだるい体を働かせ、準備をする

そっぴゃ、まだ担任の先生と会ってないな……。まだ出張なのか？

フッ

教室がいきなり、暗幕をかけたように暗くなった。

「な、なんだ!？」

ざわめくクラスメイト。混乱する教室。

大町さんがため息をついているのが見えた。

「血に塗れた魔女の瞳が開かれるとき、幻界と現界を繋げる鍵が現れる」

教室に意味不明な声が響き渡る。

真っ暗な中、スポットライトが教室の一点――ドアを照らし浮かび上がらせた。

「鍵が現れるのは魔界。そう、今こそが魔界への扉を開くとき！」

スライド式のドアがなぜか観音開きで開かれた。

教室に入ってきたのは、白衣にネクタイ、灰色の髪が目を引き一人の男性だった。

男性は歩いて教卓まで向かう、スポットライトの光も男性についていく。

教卓の前まで来ると、男性は眼を見開いた。

「幾千、幾億。幾度と無く陽が沈もうとも、我という陽は決して沈まぬ。我が名は明星<sup>みよつじやうめい</sup>令白夜！」

また変な人が出てきた……………

俺はまた、机にうなだれるのであった…………

## 第七話（後書き）

はい、第七話でした。

やっぱり小説って書くのが難しいですね。

グダグダだー、書きたい事が上手くかけないー

まず、更新遅くてすみませんでした。

レポートやら、何やらで書く時間がない上に予想以上に自分の執筆速度が遅い。

……言い訳ですね。

次の投稿は未定ですが。来週からテストなんで次の更新も多分遅いです。

感想・アドバイス等 お待ちしています。

読んでくださりありがとうございます。

突然ですが質問です。

書き方がオカシイ小説初心者なさんのよん（作者）ですが、時間がかかっても今みたいに書くか？

時間をかけずに短く書くか？ どっちがいいでしょうか？  
希望があったら教えてください。

## 第八話（前書き）

だいぶ、時間がかかってしまいました。  
なのに短いです。ごめんなさい。

それでは第八話です。楽しんでくだされば幸いです。

## 第八話

全国に複数作られている学園都市。その内の一つ、神宮学園。  
2年B組の教室の中、授業も終わり今は休み時間、教室は喧騒に包まれている。

「あれが、担任か……」

俺の声が周囲の声に混じって消えた。

「あれが担任よ」

溜息をつきながらの声は大町さん。

ポニーテールを揺らしながら話をする大町さんもこころなしか少し疲れているように見える。

朝の一件はなんだったのか、今ではもう昨日と同じ様に接している。

「そうなのか……」

深く息を吐きながら、机に突っ伏す。

どうでもいいが、朝からずっと疲れが蓄積していつてる。

「わたしは面白い先生だと思っけどな」

「さっさと慣れろ」

小倉さんに滝村も話に加わってきた。

「そうはいつでもな」

「なに！？ 私達は入学したときからあれが担任なのよ」

大町さんの勢いについて気圧されてしまう。

「一年もすれば、さすがに慣れる」

「あははは…」

滝村の言葉と小倉さんの笑い声が俺の耳に届いた。

数十分前

「幾千、幾億。幾度と無く陽が沈もうとも、我という陽は決して沈まぬ。我が名は<ruby><rb>明星

令</rb><rp></rp></r><rt><rp></rp></ruby>みようじょうれい</rt><rp></rp></r><rt><rp></rp></ruby>ひゃくや<rp></rp></r><rt><rp></rp></ruby>白夜！」

暗室のように暗い教室の中、謎のスポットライトに照らされた男の声が響いた。

いきなり教室が暗くなり、パニックになったクラス。

そこに颯爽と現れたこの男は教師地の中から音という音を消した。白衣にネクタイ、灰色の髪の男性はそのまま無言で黒板の前にいくと、

「それでは授業を始める」

授業を始めた。

昨日からクラスメイトになった2年B組の皆は何事も無かったかのように授業を受け始める。

……え！？ いいのか！？ 皆それでいいのか？

だいいち、あの人だれ？ 普通に物理の授業始まつてるけどさ…

白衣の男は黒板に公式を書いていき、解説を踏まえながらも授業を進めていく。

あれ？ 転校生の俺には何の反応もないのか？

この時期の転校だから先生達は全員知ってるのか

俺は釈然としないまま、俺はノートをとり始めた。

「こんなつまらない授業より、私には闇の使徒を狩るという使命があるのだが…」

ときおり、理解不能な言動をするが、授業自体は進んでいる。

明星令白夜って名前はともかく、先生だな。

「まあいい、ここで力を蓄えるのも大事だろう」

……言動はともかく、先生だな。

「さて、この問題を……」

教室を見渡す先生。

その視線が俺に定まると静かに顔に手をあて、もう片方の手で俺を指差す。

「誰だお前！？」

「今頃ですか！？」

思わず叫び返してしまった。

「私の2年B組にお前のようなものはいないはずだが……」

「転校生ですよ、聞いてないんですか？」

俺の一言で先生の雰囲気が変わった。

「ほう……すると、お前がゴルディアスか？」

「そう……ですけど」

含みのある笑みをしながら歩み寄ってくる先生。  
授業中ですけど、いいんですか？

俺の机の前まで来た先生。

目と目が合う

「クッ……静まれ、我が右腕よ………」

急に右腕を押さえてうずくまる先生。  
今気付いた。白衣の下、ネクタイじゃなくてシャツにネクタイが  
プリントしてある。

「これは、共鳴している！？ まさかお前は、黒衣の……」

俺がなにも言わなくても、話は進んでいた。

「いや、やめとこう、そうか、お前が」

先生は「楽しみが増えたな」と呟くと、白衣をはためかせ教室を出

て行った。

あれ、授業は？

そのまま、授業は終わった。

彼は我が2年B組の担任。神宮学園の物理教師の一人で名前は自称、明星令白夜。本名なのかどうかは誰も知らない。

突拍子も無い行動、理解不能な言動で教師陣に加え、生徒たちも迷惑させている要注意人物。クビになってもおかしくないのに、誰も彼に逆らえない。彼を注意できるのは教育指導兼2年B組の副担任の高松先生だけ。

と、大町さんが教えてくれた。

「速く慣れなきゃ疲れるだけよ」

大町さんの声に俺は「そうだね」と返す事しかできなかった。

## 第八話（後書き）

短く、早く、投稿していきたいと思います。

それでも次の投稿は未定です。

誤字・脱字など、おかしいところがあったら教えてください。修正します。

感想、アドバイス くださると嬉しいです。

## お知らせ

申し訳ありませんが諸事情により、しばらく投稿が出来ないと思います。

さらに、今回自分の小説を読み返して、あまりの酷さに書き直したいと考えました。

なので、次に投稿する時に今まで投稿した話を書き直したいと思います。大まかな内容は変わりませんが、それでも読んで感想などをいただけると嬉しいです。

もし、自分の小説を楽しみにしている方がいらつしゃるなら執筆が遅いので皆様をまたせてしまい申し訳ありませんでした。  
必ず、続きは書きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6001n/>

---

魔法青年ゴルディアスたつや

2011年10月7日15時17分発行